

のかを、彼女の弁護士デフォッセ子爵によって知ることができる。彼女は次のような服装だった。「裏地が黒で表が白のベチコート、白い化粧着の短い上着、手首で結んだ細い絹リボン、白い無地のモスリンのネッカチーフ、黒いリボンのついたボンネット帽子である。彼女は帽子と同じ長さに髪を切られていたが、その髪は真っ白だった。顔色は蒼白く、頬は少し赤みがかったが、両眼は血走り、睫毛はこわばって動かなかった。」

この間も国民公会は活動を續けていた。公会の諸派、ジロンド派⁵⁾、モンタニャール派⁶⁾、プレーヌ派⁷⁾は、互いにいがみ合っていたのである。ジロンド派は国外から襲来した祖国の危機の責任を問われて、1793年6月2日に失脚する。モンタニャール派は存続し、公安委員会⁸⁾に独裁権を与え、恐怖政治により統治する。しかしながら彼らはヴァンデの乱⁹⁾の王党派を鎮圧し、革命的フランスに対して同盟したヨーロッパを打ち負かす事に成功するのである。

革命広場で何人かの無実の人たちが処刑された後の7月14日の日曜日、(病気のため国民公会に出席しなくなっていた) マラーが、ダヴィッドが描いているように、ノルマンディから駅馬車で上京した、物静かで美しく清純で、長い黒髪を肩にたらしめている娘シャルロット・コルディ¹⁰⁾によって、温浴中の湯船の中で暗殺された。40ソルで、彼女は黒檀の柄のナイフを買っていた。長ズボンをはき、サン・キュロットの典型として通っていたマラーに面会する前に、正義の裁きをなすのは自分だと信じていたシャルロットは、次のように認めたメモを議員に渡してもらっていたのである。「貴方様がフランスに大いなる貢献をなされるように、私がしてさしあげます。」¹¹⁾ ブードリ生れのスイス人マラーは、自分の新聞『人民の友』の紙上で「みじめで腹を立てている」古きフランス全体のスポークスマンを演じており、9月虐殺の煽動者の一人だった。彼はジロンド派の没落に貢献していた。

大革命のこれらの政党について、オラール¹²⁾は次のように定義している。「ジロンド派は芸術的精神的で変りやすいフランスであり、南フランスの精神である。ロベスピエールのモンタニャール派は宗教的統制的フランスであり、北フランスの精神である。エベール派は反宗教的対立的で手に負えないフランスであり、パリの精神である。最後にダントンは18世紀の科学的純粹なる精神である。」しかしながら衝撃的事実がある。それはバイイとリヨンでの過激な民衆煽動で有名なコロ・デルボワ¹³⁾を別にすると、いずれの党派の指導者たちもパリ生れではないことである。誰よりも重要なダントンは、その声と同じように威圧的な醜男で頭でっかちのシャンパーニュ人である。ダブダブのシャツを着て

上着も裂けネクタイもだらしなく結んだだらしない服装ですべての人に大胆さを要求し、革命的パリ市民の団体コミュニューヌと議会との決裂を身を挺して防ぎながら、彼は共和制を組織した。彼は9月虐殺の時にパリ市民たちの怒りをできたら押さえようとしただろう。「彼の罪は、とオラールは言う、それはパリを愛することだったのだが、そのパリこそジロンド派の有志が破壊しようと夢想していたものである。」：「嗚呼！　と彼は言う。パリが滅亡したら、最早共和制は存在しないだろう。パリこそ自由フランスの本来の構成された中心である。」そしてアナカリス・クルーツのユートピアに与することなく、彼は主張する。「パリはすべてが帰着する中心である。パリはすべての愛国主義の光を受け入れ、そのすべての敵を焼き尽す暖炉になるだろう。自由を創造した都市に対する中傷は聞かれることなく、その都市は自由と共に亡びることなく、自由と共に勝利し、自由と共に永遠不滅に移って行くだろう。」

国民会議員は、大部分が小さなトランクだけで上京し、議会の開催中は、サン・トノレ街¹⁴⁾ やチュイルリ宮近くのラ・スールディエール街¹⁵⁾ の通気の悪い宿に泊り込み、「食堂の給仕」のような生活をしている。ロベスピエールは366番地の指物師デュプレ¹⁶⁾ の家に部屋を借りていた。アナカリス・クルーツはヤコブ街のモデーヌ・ホテルから通い、コンドルセ¹⁷⁾ はブルボン街¹⁸⁾ から、ボワシー・ダングラ¹⁹⁾ はボヌ街²⁰⁾ から、ラカナル²¹⁾ はバック街²²⁾ から登院していた。バラス²³⁾ とカンパセレス²⁴⁾ は通りを一本渡るだけで旧マルサン館（現在の装飾美術美術館²⁵⁾）の建物に着き、劇場のホールの席につくことができた。そこでは「最高存在に告知された救世主²⁶⁾」たるロベスピエールが雄弁をふるい、クートン²⁷⁾ が議長を勤めていたのである。貧富にかかわらず、彼らは日当36リーヴルが支給された。彼らの収支はトントンだったが、国王への賛辞を消した建物の正面に書かれた「統一、共和制の不可分、自由、平等、博愛、または死」を誇りをもって見つめたのである。

死をギロチンが拡大する任務を持っていたが、そのやり方はでたらめだった。

（ブーシャルドン²⁸⁾ 作のルイ15世像²⁹⁾ の代りに建立され）ロラン夫人³⁰⁾ が斬首される前に挿んだ現存のストラスブールの像³¹⁾ と、当時は自由の像が立っていた現在のオペリスクの間に建造された革命（コンコルド）広場の「首斬台」³²⁾ は、休むことなく作動していた。前後とも短く刈ったローマ皇帝ティトゥス風のかつらの巻き毛の髪粉のついた多くの頭が、三角形のギロチンの刃の冷たさを知ることになるのだが、増大する混乱の中で処刑する側の煽動者たちさえやがてはすべてこの刃の下を通るようになるとは想像さえでき

なかった。ロラン夫人の友人でジロンド派の議員ビュゾ³³⁾(彼は自分の党が追放された後で自殺する)は、パリの民衆について、奴らは「ギロチンを使う共和派だ」と書いている。他方、エベールの新聞『デュシェーヌ親父』*le Père Duchêne*³⁴⁾は「未亡人³⁵⁾」に対し次のような連袴を唱えるように呼びかけている。

「聖ギロチン様、愛国者の守護者よ、私たちのためにお祈り下さい！ 愛すべき断頭台様、私たちを憐れんで下さい！」

しかしギロチンの刃は容赦しなかった。牧月23日(1794.6.11.)から熱月9日(1794.7.27.)までの間は一日に40人から60人が処刑された。革命裁判所長フーキエ・タンヴィル³⁶⁾は次のようにいった。「首は嵐の日の瓦のように落ちる」と。ギロチンにより処刑された人たちは次のような人たちである。ロラン夫人、シャルロット・コルディ、バイイ、自分の従弟である国王の死刑に賛成票を投じたフィリップ・エガリテ、エベールとその一派、ダントンとその一派、カミーユ・デムーラン、クルーツ、化学者のラヴォワジエ³⁷⁾、マルゼルブ³⁸⁾など、実にさまざまである。処刑台に連行されて行く自分を見物するパリの民衆について、独房のダントンは、ひどい奴らだ、私の通るのを見て「共和国萬歳！」と叫ぶだろうよ、と言っていた。彼らは死刑の快樂にほとんど酔うために詰めかけた。革命裁判所で、やがて処刑される番となるフーキエ・タンヴィルが傍聴席にいた女性に何で生きているのかと質問したのに対し、「あんたがギロチンで生きてるように、私は神様への感謝で生きているのよ」と答えたという。

1793年以來、ギロチンは一人の高慢な男の道具になってしまった。アラス出身の弁護士ロベスピエールは当時全権力を掌握したのである。平等主義者、高潔なる人物として、彼は人気者だった。しかし狂信的で人を信ぜず、他人が自分を凌駕することを認めなかった。何時もさっぱりと髭を剃り、めかしこんで、艶のある衣服を着て半ズボンのキュロットをはき、冷然たる微笑を浮かべ、広い額をもち、ほとんど女性的といってよい容貌の小品さは、メルシエに言わせると、「野良猫」にそっくりという。彼は山だしなのだ。彼は1792年8月10日の王制打倒に深くかかわり、1793年6月2日のジロンド派の撃滅にも活躍している。1794年6月8日、彼は「最高存在」の宗教を創立し、淡青色の衣裳を纏い、壯麗にこの祭典を祝ったのである。その時彼は自分をこの地上の俗界の法王と信じた。

シエイエス³⁹⁾に対して人々が軽蔑を抱いていた時、ロベスピエールは人々を恐れさせ、憎悪を惹起させる。しかし公安委員会で、彼の影響力は二つの反対勢力と衝突する。過激革命派のエベール派とダントンに追随する革命支持派の市民即ち寛容派である。独裁者は

これら両派を打倒する。最初の徒党は3月に撃破される。次にダントン派が処刑される。しかし政府は分裂したままだった。公安保安会と保安委員会⁴⁰を冷たい対立意識が分裂させていたのである。ロベスピエールは独裁者然として非難される。数か月間公安委員会から離れた後でまた復帰してみると、錯綜してしまった多くの法令をどう適用してよいかわからない状態になっていた。ロベスピエールは1794年7月27日即ち共和暦2年熱月8日に彼が国民公会で宣言した新しい党派が成立すると信じたのである。その翌日、氷のような沈黙の中で、国民公会は彼が更に300名の首を要求するのを聞く。誰もが追求されるのは自分だと感じたのである。しかし中間派の人々は彼を殺害しようと決心した。次の日、ロベスピエールは彼らを国民公会で再び見かけるのだが、議場ではサン・ジュスト⁴¹が彼の代弁をしようとしたが無駄だった。「独裁者打倒！」の叫び声が聞える。演壇に登ったロベスピエールは自分の発言を聞いてもらえなかった。「ダントンの血がお前を窒息させてるんだ」と一人の議員が彼に浴びせた。タリアン⁴²が暴君を告発するために飛び出す。「もし国民公会が奴を弾劾する勇気が無いのなら、私は持っている短刀で奴の胸を突き刺すぞ」と彼は言った。

弾劾は成功する。憲兵たちがロベスピエールを逮捕する。リュクサンブールではこのような重要人物の拘留を引き受けるのを拒否する。剛直廉潔の士（ロベスピエールの綽名）は、まだ暴動の先頭に立ち、武器を取るとアピールする事が出来ただろう。「だが誰の名で？」と彼は自問する。文字と権利が彼にとってはすべてに優先していた。真夜中頃、市庁舎で、彼は自分の退職に署名しようと決心する。しかし名前の最初の二文字を書いた時、彼の手は止まる。血が余白を汚していたのである。国民公会の憲兵がホールに乱入した。彼らの一人がピストルを発砲し、彼の下顎を砕いた。重傷を負ったロベスピエールは、その夜をフール館の公安委員会の机の上で過した。彼はコンシェルジュリ⁴³に連行される。その翌日、裁判なしで、彼は20人余りの同志と共に処刑台に向うのだが、その中には誇り高い美男のサン・ジュストや病気で体が麻痺したクートンがいた。人々は露店の上や窓辺や屋根の上に群がって、彼自身が多くの正義の士を送った処刑台にこの独裁者が連行されて行くのを見物したのである。罪人を運ぶ馬車を警護していた騎兵は抜き放った剣の先で平然たる彼の顔の人々に指し示した。死刑執行人はロベスピエールからその傷を覆っていた包帯を手荒くむしり取った。すると下顎が上顎からはずれ、大量の血が流れ落ち、それを見て人々は喝采をしたのである。

恐怖政治は終わった。告発と人間狩のこの期間中どうしていたかと人に聞かれて、生き残っ

たシェイエスは、「生きていたよ」と答えるだろう。

この悲劇的な事件の間、人々はパリで何をしていただろうか？ ルイ 16 世の徴税請負人たちは、新しい税金を徴収するためこの都市の周囲に新しい塀をめぐらしていた。この処置に人々はすぐさま反撃した。

「パリを囲む壁は、パリを不満にする」

Le mur murant Paris, rend Paris murmurant

1785 年から既に、この石塀の周囲に、新しい「バリア」即ち「パリの城門」が建設されていたが、大建築家クロード・ニコラ・ルドゥー⁴⁴⁾のプランによるこれらの建物は実にさまざまな形をしており、一軒だったり、城門の両側に一对で建てられた時もあった。ルイ 16 世の王政と大革命にまたがってしまったルドゥーは不幸にも彼の全力量を見せる機会を持ってなかった（ラ・ヴィエット⁴⁵⁾とダンフェール・ロシュロー⁴⁶⁾に彼の建造物は現存している）。

(続く)

パ　　リ

—— 誕生から現代まで ——

(訳　注　XVI)

1) 1792年9月21日、国民公会は第1回の議会を開催した。749名の議員のうち、160名がジロンド派、140名がモンタニャール派、残りが中立のプレーヌ派だった。議長はジェローム・ペティヨン。この会議で王政廃止が決議される。9月25日、ダントンの要請で「唯一にして不可分のフランス共和制」が宣言される。この後、フランス軍はオーストリー軍を撃破し国境の安全を確保、ベルギーに進撃してブリュッセルを占領するに至る(11.14.)。外敵の進攻の不安が一扫された事は、モンタニャール派などの革命勢力を勢いづかせ、更にチュイルリ宮の秘密金庫から、国王やミラボーの裏切り行為を暴露する密書が多数発見され、国王を擁護し革命の過激化を阻止しようとしたジロンド派を弱体化させた。彼らは国王の裁判開始を阻止する力を失ってしまった。かくして12月10日、第1回法廷が開かれる。国王への判決は議会の投票で決定されたが、パリ市民の過激派が傍聴席につめかけているなかで、彼らの面前で指名点呼の公開投票が強行されたため、ジロンド派からも国王の死刑に賛成した者が5名でたのである。国王は有罪か、国民投票をすべきか、いかなる刑に処すべきか、刑の執行猶予を認めるべきかの4回の票決が1月14日から18日までの間になされ、投票総数720名中683名が有罪とし、国民投票の是非は425票対286票で否決、国王への刑罰は387票対334票で死刑が確定、刑の猶予については380票対310票で否決し、国王の無条件即時執行が確定したのである。国王ルイ16世は3日後の1月21日に処刑された。

2) Henri Essex Edgeworth de Firmont (1745-1807) : アイルランドのエッジワースタウン生れの聖職者。トゥールーズのジュズイットの神学校で学び、王妹エリザベート夫人の告悔師となり、彼女の紹介でタンブル塔のルイ16世に呼ばれ、国王の最後の日々に立会った。1月20日の夕べ、タンブル塔に呼ばれた彼は、当局の許可を得てミサを行った。彼はルイ16世が処刑場へ連行された時の辻馬車に同乗し、処刑台上まで国王に侍立している。「サン・ルイの息子よ、天国へ登りたまえ！」と彼がルイ16世に向かって言ったと一部には伝えられている。その後の彼の生涯は注目されるような事はない。1795年4月に英国へ亡命、ルイ16世とエリザベート夫人の最後の言葉を記した書類をルイ18世となっていた王弟に手渡し、彼の元にとどまり一生を終えた。ルイ18世は彼のためにラ

テン語の墓碑銘を起草してやった。

3) Sanson : この一族はイタリアのフィレンツェ出身で、マリ・ド・メディシスがフランスに嫁入りした時に同行したと伝えられている。フィレンツェでは既に二百年前から処刑を家業としていたといわれる。パリに定住してからは 1688 年から 1847 年まで死刑執行に従事している。

ルイ 16 世を処刑したのはシャルル・アンリ・サンソン (1740—1793) である。王党派の史家によれば、国王を処刑した後、彼は大いに懊悩し 6 か月後に悶死した、と伝えられている。彼は父の死後に後継者となったのが 1770 年といわれる。シャルルの後を継いだのが息子のアンリ・サンソン (1767—1840) で、1793 年の父の死の後に死刑執行人となり、マリ・アントワネットを処刑したのは彼である。彼はその他に王妹エリザベト夫人、マルゼルブ、オルレアン公フィリップ・エガリテを処刑している。彼はその仕事からは想像できないほど、極めて優しく柔和で友情に厚い人物だったという。

4) Jacques Louis David (1748—1825) : フランスの画家で新古典派の指導者。初めブーシェらに学び、1774 年にローマ賞を得てイタリアに留学 (75—80, 83—86)。帰国後は「ベリサリウス」*Bélisarius* (1780), 「ホラティウス兄弟の誓い」*Le Serment des Horaces* (1784) を描き、風俗画などを排し厳格なデッサンと整然とした構図をもつ古典主義の画風を確立し、アングルやグロなど秀れた弟子を養成した。彼はフランス大革命に熱狂し、1792 年には国民公会議員に選出された。ルイ 16 世の処刑に賛成票を投じたため、王政復古になると弑逆者として追放されブリュッセルで歿した。革命中も歴史的社会的題材を取り上げ、迫真的写実性で感銘を与えた。「マラーの死」*La Mort de Marat* はその代表作。帝政時代となるとナポレオンに愛され、「サン・ベルナル峠のボナパルト」*Bonaparte au mont Saint-Bernard* や「戴冠式」*Couronnement de l'empereur* などの大作を残している。マリ・アントワネットのスケッチは、ミシュランのガイド・ブックの『パリ』にある。

5) Les Girondins : 立法議会と国民公会で重要な役割を演じた党派。この派の領袖たちが主としてジロンド県選出の議員だったのでこの名称があるが、他にもこれらの領袖たちの名をとり、ブリソ派、ビュゾ派、ロラン派などとも呼ばれた。大多数は弁護士やジャーナリスト出身で、実業家や銀行家などブルジョワ階級が支持層である。従って、彼らは旧制度を打破し民主的な新社会を実現するための穏健な改革を目標としていた。それ故に彼らは時として過激に走るパリの民衆を信頼せず気心の知れた地方の人々の支持を得ていた。

1791年10月の立法議会で、ジロンド派は最も重要な党派となり、国王を亡命貴族や外敵から引き離して大革命に関与させようと、議場で熱弁を揮った。この事はジロンド派に革命的闘士の印象を与えた。「普遍的自由の十字軍」たらんとするブリソらの発言は熱狂的な喝采で迎えられる。しかし革命に反対のルイ16世を説得できず、それがそのままジロンド派の不信を増大させてしまう。8月10日事件と9月虐殺は、ジロンド派が抑制しようとしていた努力が水泡に帰した事を示すものだった。革命の激化と反革命分子への弾圧は穏健派の彼らにも向けられる。国王の助命を国民に訴えようとした彼らの提案は否決され更に革命裁判所設置反対も否決されてしまう。彼らの有力な同志の一人デムーリエ將軍の立憲王政によるフランス再建という反革命の陰謀が暴露され、彼が敵国オーストリーに亡命するに及んで、ジロンド派の立場は益々危うくなっていく。議会で多数派であるジロンド派を打倒するためにモンタニャール派は非常手段に訴える。パリの革命派の人民の蜂起である。48地区のうち36地区の民衆の支持を得たモンタニャール派は、武装した8万の市民で議場を包囲させ、その圧力の下で、32名のジロンド派の議員と2名の大臣の逮捕を決議させた。何名かが逃走に成功し、地方で反革命の蜂起を計画する。しかしロラン、ベティオン、ビュゾらは自殺し、ブリソら15名は、10月31日パリで処刑された。ロラン夫人は11月8日に処刑される。夫のロランは5か月の逃亡後、最愛の妻の処刑を知り自殺するのである(1734.2.18.)。

6) Les Montagnards : 「山獄党」という旧訳があるように、議場の一番上の高い座席を占めていた立法議会の過激派を指し、当時のジャーナリストたちによってつけられた最初は蔑称だった。この派の構成分子は生れも育ちも全く別々で、弁護士、ジャーナリスト、革命かぶれの貴族、宣誓神父、純粋な理想主義者や冒険家などである。彼らはパリ市民に支持されて1792年9月の国民公会に登場するが、749名の定員のうち140名の少数派だった。しかし彼らはパリ市民の過激派の武力を背景に徐々に発言力を増大する。三巨頭はダントン、マラー、ロベスピエールである。ジロンド派を打倒した後(1793.6.2.)、中間派やジロンド派の有志さへも取り込んで最大派閥となるが、路線の対立から分裂し、ロベスピエールらは反対派のエベール派やダントン派を肅正する(1794.3.-4.)。しかしロベスピエールの独裁に対し生き残ったモンタニャール派が反乱を起し、1794年7月27日(共和暦第2年熱月9日)にロベスピエールを逮捕し恐怖政治を終了させた。翌28日彼は裁判なしで弟や同志ら16名と共に処刑され、29日には70名のロベスピエール派が処刑され、更に12名がその翌日に処刑されたのである。

7) La Plaine ou Le Marais : プレーヌ派またはマレ派。国民公会で最も穏健な会派につけられた蔑称。平土間派とか沼地派の訳もある。モンタニャール派が議場の最も高い座席を占拠していたのに対し、プレーヌ派は最も低い平らな場所の座席を占めていた。彼らは大勢順応型で日和見に終始し、附和雷同し局面を決定した。自己保身が第一であるため、定見を持たず外部の圧力に弱かった。そのため消極的ながら結果的に政局を左右した。ジロンド派の逮捕もロベスピエールの失脚もプレーヌ派の動向の結果といえよう。国民公会の最初の議員 749 名中、160 名がジロンド派、140 名がモンタニャール派に対し、残りの 449 名がプレーヌ派であった。

8) Comité du salut public : フランス大革命時代に組織された最も重要な委員会で、1793 年 4 月 6 日、モンタニャール派の提案により国民公会の布告により設置された。救国の英雄として国民の信頼を得ていたデュムーリエ將軍の立憲王政樹立の陰謀が発覚し、將軍が敵国オーストリーに亡命するという事件を機に、国内の反革分子を取締り革命遂行に支障をきたさぬようにするため、急ぎ設立された。この委員会はすべての権限を有し、反革命の容疑者を審査する革命裁判所、告発を受理するためフランス全土の市町村に新設された革命委員会、警察を管理する公安委員会を監督指揮した。委員は 9 名で国民公会から選出されダントン、カンボンなどが入った。やがて新委員としてサン・ジュスト、クートン、ロベスピエール、カルノーなどが交替で参加し、次第に過激化していく。恐怖政治を断行したのがこの委員会である。しかしやがて委員間の主張や路線の対立により分裂し、権力闘争に破れた委員たちは次々に粛正された。エベール、ショーメット、ダントンに次いで熱月 9 日のクー・デタではロベスピエール、サン・ジュスト、クートンが処刑される。ロベスピエールの死で公安委員会の独裁は終るが、完全に消滅するのは執政政府が成立する 1795 年である。

9) Guerres de Vendée : フランス西部のメーヌ、アンジュー、ポワトゥー、ブルターニュ南部を舞台に、特にヴァンデ地方を中心に展開した反革命の叛乱。指導者は王党派の貴族や非宣誓僧侶たちで、キリスト教信仰と王権の尊崇をスローガンに保守的な農民たちが参集した。農民たちは、国民公会が実施を宣言した 3 万人の青年の徴兵に絶対反対の立場だった。1793 年 3 月 10 日、決起した農民たちは領主だった貴族らに指揮され、中央政府の屯所を襲撃し、共和国軍兵士や役人たちを血祭に上げた。「カトリック王党軍」を名乗った叛乱軍は 4 万人に達し、勢威は大いにふるった。国民公会は対外戦争に主力をあてていたため、最初は十分な兵力をさけず、急いで派遣した新兵たちは地の利を活用したヴァ

ンデのゲリラ部隊に翻弄されてしまう。勢力を増大させた叛乱軍はロワール河口の要衝ナントを占領しようとして包囲する。しかしここまでが叛乱軍の最盛期で、鎮圧に本腰を入れた共和国政府は歴戦の部隊を本格的に投入し、叛乱軍に決戦を挑んだ。充分な攻城砲を持たない叛乱軍はナントを陥落させられず、有能な司令官ジャック・カトリノー（1759—1793.7.11.）を失ってしまう。国民公会はヴァンデ叛徒はすべて死刑に処し捕虜にしないこと、更に住居などの建物や農作物などを焼き尽す焦土作戦を遂行するよう、征討軍に厳命したのである。クレベールやマルソーやオッシュといった名将に指揮された増援部隊は徐々に叛乱軍を追いつめ、占領されていた町や村を取り戻していった。叛乱軍の組織的抵抗は、1794年3月4日、指揮者のラ・ロッシュジャ克蘭伯爵の戦死で終り、残存兵はゲリラとなって分散してしまう。ロベスピエールの没落後、態度を軟化した国民公会は名誉ある条件でヴァンデの残存兵たちと和睦し、1975年5月からヴァンデ地方に平和が訪れる。しかしこの平和は永続しなかった。王政復興を旗印に亡命貴族たちが英国からキプロンに上陸してきたのである（1795.6.27.）。これに応じてヴァンデは再び決起するが、オッシュ將軍の巧妙な作戦により上陸軍は粉碎され、ヴァンデ最後の叛乱指揮者シャレットもストップレも討伐されてしまう（1796.2.～7.）。かくしてひとまずヴァンデの乱は鎮圧された。焦土作戦と戦火は多大の人的物質的損害を与えた。

10) Charlotte Corday (1768—1793)：正式の名は、Marie-Anne-Charlotte Corday d'Armont で貧しくはあったがノルマンディの貴族の家柄の出で、かの大劇作家コルネイユの血筋につながるといわれ、彼女の一途な情熱的行動は、この劇作家の悲劇の女主人公のそれを反映している、とみる人々もいる。シャルロットには弟2人、妹1人がいたが、彼女が12歳の時に母が死亡し、カーンの修道院に入り、孤独で寂しい日々を送るようになる。よく夢想到に耽り、コルネイユ作品の一節を暗誦していたという。再婚した父ジャック・フランソワはなにがしかの金銭的援助をただけで、彼女に関心を示さなかった。

シャルロットはやがて伯母の一人ブレットヴィル夫人に引き取られ、カーンの彼女の家で過すようになる。財産もないシャルロットには結婚の希望もなく、修道院時代と同じように夢想到に耽り、読書に喜びを求める傍ら勉強に励む物静かな娘だった。大革命という社会の急変も、周囲の人々と同様に新聞やジロンド派の密使たちがもたらす知識しかなかったが、革命の流血の惨事の張本人がマラーという男だという事だけは、シャルロットに信念として植えつけたのである。やがて政争に破れたジロンド派がパリから逃亡し、彼らのうちの何人かがノルマンディに避難してくる。彼らはこの地で挙兵してパリに進攻し、恐

怖政治に終止符を打とうと活動し始めた。シャルロットもかかる決起集会に参加し、初めてジロンド派の論客たちを目にする。彼らの熱弁に彼女の胸は高鳴り、ジロンド派の理想に深く傾倒してしまうのである。彼女はこの理想の実現のため、自分も何かの役割を果たそうと決意する。7月7日、パリ進撃の義勇兵募集に応じて集結した者はカーン地方で僅か30名だった。この悲しい現実が彼女にマラー暗殺という破天荒の難事を思いつかせたといわれる。

この当時、彼女は24歳だったが、年よりずっと若く見えた。すらりとした長身でノルマンディ出身の女性の典型といえた。色白で金髪、眉毛は栗色で、目には限りない優しさを湛えてしかも誇り高かった。鼻は少し高く、顎も少し張っていたが、実瓜形の顔全体を損なうものではなかった。彼女の声は涼やかで、一度聞いたら何年も忘れられないといわれ、彼女の気品と美貌は当時の人たちの語り草になっている。

マラー暗殺計画を打ち明けられたジロンド派の議員たちは、当然ながら誰も本気にしなかった。しかし彼女の決意は固く、国に残っている父と妹に会いに行き、英国に亡命するつもりだから別れに来たと言い、その足でパリに出発したのである。7月11日にパリに到着した彼女は、ヴィユー・オーギュスタン街17番地のプロヴィダンス・ホテルに投宿する。ジロンド派の紹介状でジロンド派から国民公会派に寝返ったデュブレなる人物を尋ね、海軍省からの書類の入手に同行してもらおうと依頼し2日を過す。7月13日夕刻、彼女はバレ・ロワイヤル近くの本屋で議員暗殺犯の裁判記録と金物屋で鞘と柄の黒い食卓用ナイフを2フランで購入、三角形の肩掛けの下に隠し、コルドリエ街30番地（現在のエコル・デ・メディシーヌ街22番地）のマラーの家に向った。彼女の上品で優雅な物腰はマラーのボディガードたちの警戒心を解き、その日のうちの三度目の面会の時に、彼女はマラーが温浴していた小部屋に通された。午後7時15分だった。シャルロットの一撃は肺と心臓に達する致命傷を与え、マラーは即死し、大量の血が飛沫となって小部屋を染めた。逮捕された彼女は即決裁判の結果、死刑を宣告され、1793年7月17日処刑された。24歳4か月と20日の人生だった。

11) 彼女が前夜に書いた面会要請の手紙の全文は次の通りである。

「市民マラー氏へ

私はカーンから参上しました。祖国に対する貴方様の愛は共和国の不幸な事件を知らされれば喜ばれるだろうと私は思います。1時頃にお宅にうかがいます。少しばかりお時間をさいて私の話をお聞き下さいませんか。貴方様がフランスに大いなる貢献をなされるよ

う、私がしてさしあげます。」

12) François Alphonse Aulard (1849–1928) : フランスの歴史学者、ソルボンヌの教授 (1886–1922) を務め、テーヌの論考に反駁し、経済的見地から検討した 1789 年の革命の浩瀚な研究を発展させた。主著は『ジャコバン派の社会』*La Société des Jacobins* (1889–97)、『フランス大革命政治史』*Histoire politique de la Révolution française* (1901) など。

13) Jean-Marie Collot-d'Herbois (1749–1796) : フランスの革命政治家。始め旅役者だったが、ジュネーヴの劇所支配人となる。大革命に共感しナンシーの軍反乱に加担、『ジェラルド親父の年鑑』*l'Almanche du père Gérard* を出版して有名人となり、革命派のクラブでの雄弁を揮った。8 月 10 日事件や 9 月虐殺事件の煽動者の 1 人になり、1792 年に国民公会議員に選出され、君主制廃止の演説をした。ジャコバン派に属しジロンド派を攻撃、公安委員会委員に就任 (1793)、恐怖政治を実行し、リヨンの反革命暴動を残酷に鎮圧した (1793 年末)。エベール派に接近しロベスピエールと対立、彼を打倒するため熱月 9 日のクー・デタを計画して、見事にロベスピエール追放に成功するが、その後の反動政治により彼も議会から追放され、流刑地のギアナで歿した。彼は 2 ダースほどの喜劇や悲劇を創作しており、これらの作品は大革命前後に上演されている。

14) rue Saint-Honoré : 第 1 区と第 8 区にのびる長さ 1460 米、幅 14.6 米から 20 米の道で、昔の中央市場 (レ・アル) とロワイヤル広場を結んでいた。現在のこの通りの 176 番地から 184 番地にあったサン・トノレ教会がこの通りの起源である。教会は 1204 年に建立されたが 1792 年に取り壊されてしまった。昔はボン・ザンファン街からサン・トアンを経てクリシー方面へ、アルジャントゥーユ街からルール、ヌイイ橋の方に向う街道の一部だったが、中央市場の開設後に延長工事が継続され、その間に多くの名前がつけられたが、1638 年以降から現在の名で通り全体が呼ばれるようになった。

この通りはパリ一番の繁華街となり、多くの有名な商店や高級デザイナーの店が立ち並んでいる。111 番地はサン・トノレ街とアルブル・セック (枯木) 街の交差する T 字路で、その名の起源は、この辻に永い間絞首台が建っていて、その「枯木」からである。この近所で生れたシラノ・ド・ベルジュラック (1619 年生れ) とモリエール (1622 年生れ) が、子供の頃、この絞首台の周囲で一緒に遊んだのではないか、という空想も楽しい。161 番地はシャルル 5 世の建設した城壁の城門の一つのサン・トノレ門の跡地で、1429 年 9 月 8 日木曜日、パリ占領を企図したジャンヌ・ダルクが城兵の矢で太腿を負傷した古戦場で

ある。なほ彼女と同行したジル・ド・レ元師はかの有名な「青ひげ」Barbe-Bleueといわれる。

15) rue de la Sourdière：パレ・ロワイヤル地区にあった通りの一つで、サン・トノレ街とコンブス街を結ぶ長さ 956 米、幅 9 米の道路。ラ・スールディエール卿ラ・ファジュ殿の開設した乗馬学校の跡地を横断して開通し、1663 年にこの名が定着した。ラ・フォンテーヌがこの通りに住んだといわれているが正確な番地は不明である。

16) Maurice Duplay：生歿年は不明だが、1793 年頃は 55 歳ぐらいといわれる。サン・トノレ街に指物師の店を開き成功し、数軒の家作と当時としては高額な 15.000 フランの年金を得て、大革命前に仕事をやめて引退していた。しかし社会の激変である程度財産を失ったため、この損害を補う目的で再び指物師に復帰し仕事場を再開した。このアトリエの建物はカプチン尼僧院の付属建築物で、国有財産になっており、彼は借家人として使用していた。このアトリエの他にも部屋があり、手入れをして快適な生活を送ることができた。ジャコバン・クラブの会員だった彼は、そこでロベスピエールと知り合い、ジャン・ド・マルスの虐殺事件 (1791. 7. 11.) の時に避難して来たロベスピエールを匿ってやるのである。それ以来ロベスピエールはこの家に滞在するようになる。やがて妹のシャルロットも来宅する。

デュプレは熱烈な愛国者で可成り教養もあり、真面目で善意の人だった事は、多くの証人がいる。ただ謙虚な人柄だったため、目立つような公的活動はしなかったが、ロベスピエールにおされ、革命裁判所の陪審員になった。しかしこの事が熱月 9 日のロベスピエール失脚後に彼の一家を不幸に陥しこむ。独裁者の一味として逮捕され、デュプレ夫人はサント・ペラジ刑務所で同じ房に収容されていた賣春婦たちに虐待され、数日後に悲惨な死を遂げるのである。

17) Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, Marquis de Condorcet (1743-1794)：フランスの数学者、哲学者、政治家。ドーフィネ地方の貴族の家柄の出で、ジェズイット派の初等教育を受け、パリではナヴァール学院に学んだ。『積分論』*Essai sur le calcul intégral* (1765)、『解析論』*Essai d'analyse* (1768) を発表しダランベールに認められ、26 歳で科学アカデミーに入った (1769)。またチュルゴー、ヴォルテール、ダランベールらの哲学者とも交際し、チュルゴーが蔵相の時に貨幣検査官に任命され国内関税や賦役労働の是正に努力した。大革命には共鳴して政治活動に参加し、最初は立憲王政派だったが、やがて共和主義者になった。1791 年に立法議会に当選、ついで国民公会議員としてはジ

ロンド派に属し憲法委員会で活躍したが、1793年6月2日のジロンド派の失脚と共に反革命分子としてジャコバン政府から死刑の判決を下された(1793)。8か月後の逃亡生活の後に逮捕され、パリ近郊のブル-ラ-レーヌの町のルクレルク大通り80番地の家の仮牢に留置され、その小部屋の独房で自殺した(1743.9.17.)。この逃亡期間中に執筆した『人間精神の進歩の歴史素描』*Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain* は彼の代表作で、人類は真理と幸福に向かって進歩して行くと言言している。また議会で教育委員長を務めた時に作製した公教育組織の計画案は(1792)、フランスの近代的国民教育制度の設立に貢献した。

18) rue de Bourbon とあるが正しくは quai de Bourbon である。第4区のサン-ルイ島の河岸でマリ橋からサン-ルイ橋までの長さ367米、幅8米の通り。1614年から16年にかけ建設され王家の名をとりブルボン河岸と命名された。大革命時代の1792年には共和河岸、1806年にはアランソン河岸となったが、1814年に元の名に戻り現在に至っている。サン-ルイ島の下流の先端部分で左側のオルレアン河岸と合するが、ここまで延長工事が完成したのは1867年のことである。

19) François Antoine, comte de Boissy d'Anglas (1756-1826) : フランス大革命時代を生き抜き帝政時代に栄爵に包まれて死んだ政治家。プロテスタンの家の出身で弁護士となり、1789年の三部会では第3身分の議員となった。国民公会議員としては、1795年5月20日(共和暦牧月1日)の暴動の時、議場に侵入した過激派の市民が恐怖政治の再開を要求して彼らの乱入を阻止したフェロー議員をピストルで射殺し、斬り落した生首を槍に突き刺して眼前にさしだすという脅迫にも屈せず、同僚の首にうやうやしく一礼して暴徒たちの度肝を抜いた。この間に国民衛兵が駆けつけ暴徒たちを拘束したのである。

彼は共和暦3年の憲法制定に尽力した一人で絶大の人気を得、五百人会議員選挙(1797.9.23.)では72の県から選出され、この新議会の議長に就任するのである。しかし1797年9月4日(共和暦5年実月18日)の総裁政府のクー-デタにより議会を追われ、逃亡に成功した彼は流刑を免れた。しかし機を見るに敏な彼は新時代の指導者としてナポレオンに迎合し法制審議院に当選(1799.12.13.)、第一帝政時代には元老院議員として伯爵に叙せられ、ナポレオンの没落を予見するや王党派に転身し、王政復古時代にはフランス貴族に任ぜられている。

20) rue de Beaune : 第7区にあり、ヴォルテール河岸とユニヴェルシテ街を結ぶ長さ210米、幅10米の通り。1640年に開通した時は rue de Pont (橋通り) という名だった

のは、この通りがユニヴェルシテ街をバルビエ（現在のロワイヤル）橋につないでいたからである。しかし正確な年代は不明だが現在の名になった。この通りの5番地にあったフランス・ホテル、後に改名してロレーヌ・ホテルとなった家具付きのホテルに、ボワシー・ダングラは宿泊している。1804年にはシャトーブリアンも投宿している。

21) Joseph Lakanal (1762-1845) : 神父だった彼は大革命勃発までムランで哲学教師をしていた。国民公會議員として公教育委員としてコンドルセと共に働いた。科学と芸術の保護に没頭した彼は、王立庭園の廃園に反対し、これを自然史博物館に転生させた(1794)。また多くの高等教育機関を新設、エコル・ノルマル(1794)、東洋語学校、経度学会などが彼の努力で創立された。五百人會議員として総裁政府の役人となるが、霧月18日のクー・デタ後はサン・タントワヌ街の中央高校(現在のシャルルマーニュ校)の校長に甘んじなければならなかった。王政復古になるや、ルイ16世の死刑に賛成した弑逆者としてアメリカに亡命しなければならなかった(1815)。ルイジアナ大学の学長に選出されたが、アラバマで農場経営にあたるため、この職を辞している。1833年に帰国し政治倫理学アカデミーに選出された。

22) rue de Bac : 第7区にあり、アナトール・フランス河岸のロワイヤル橋からセーヴル街に至る長さ1150米、幅18米から20米の道。1550年にセーヌ川の渡し舟「バック」の発着場がつくられたが、1564年以来、チュイルリ宮建設用の石材を運ぶために大いに利用されるようになった。またセーヌ川までヴォーヅラルの石切り場から石材を円滑に移送するため、野原の中に、現存のノートル・ダム・デ・シャン街、サン・プラシド街、デュパン街、バック街とつながる一連の道路が建設されたのである。セーヌ川に達する道路部分が「渡し場大道」grand chemin de Bacと呼ばれ、今日のバック街になった。本格的な改修は1662年から開始されるが、この年はアンリ4世の最初の妃マルグリット・ド・ヴァロワ(1553-1615)の旧邸跡地の分譲が開始された年である。彼女の宮殿の庭園がバック街まで広がっていたのである。この分譲以後、多くの豪邸が時代と共に建築され、多くの有名人がこの通りに住んだ。シャトーブリアンは118番地のクレルモン・トネール館で歿している(1848.7.4.)。スタール夫人は102番地でサロンを開き、悲劇女優マリ・ドルヴァルは110番地に住んでいた。

23) Paul François Jean Nicolas, comte de Barras (1755-1829) : 南仏の名門貴族の出身。陸戦隊に入隊し、インドに派遣され勇戦するが、ボンディシェリで英軍の捕虜となった。軍上層と意見を異にしたために除隊させられ帰国する。パリで放蕩生活を送るう

ち、なんとなく革命気分染まり、バスターユ攻撃に参加、ジャコバン派に加入、故郷のヴァール県から国民公会議員に選出され、ルイ 16 世処刑に賛成票を投じた。政府委員になり南仏地方で王党派の反革命運動を苛烈に弾圧した。トゥーロン攻撃の時、当時無名の士官ナポレオンを抜擢し、彼に最初の軍事的勝利をつかむ機会を与えている。インドでの軍歴を買われてイタリア派遣軍司令官に任命された。熱月 9 日のロベスピエール打倒の首謀者の 1 人で、市庁舎でロベスピエールを逮捕したのも彼である。1795 年 10 月 5 日 (共和暦 3 年葡萄月 13 日) の王党派の叛乱をボナパルトの協力で一掃、総裁政府の一員となり (1795.11.)、権力の絶頂に立った。しかし彼のあまりの放蕩ぶりに批判が集中し、更に王党派との陰謀の風聞が広まって人気急落、1799 年 11 月 9 日、いわゆる霧月 18 日のナポレオンのクー・デタにより政界からの引退を強制された。ブリュッセルに亡命した後に帰国、1805 年から 13 年までマルセユに住んだが、この間に反ナポレオン運動に密かに協力したといわれる。ナポレオン没落後はパリに帰り、政治生活から完全に引退し、シャイヨーの豪邸で優雅な生活を送り平穏な最後を迎えた。旧貴族社交界の洗練されたエチケットを身につけた洒脱な紳士で人好きのする人物だったという。

24) Jean Jacques Régis de Cambacérès, duc de Parme (1753–1824) : 法曹家の古い家系で、父の跡を告ぎ刑事裁判所長となった (1771)。三部会の貴族部会の秘書の後、エロー県選出の国民公会議員となり (1792.9.), ルイ 16 世と弁護人の権利を保証するように主張した。評決の投票は死刑の賛否を明白にしなかったため、反対票にカウントされている。この頃から彼の主要な関心は民法編纂に向けられた。熱月 9 日事件に際しては反ロベスピエール派に属し、議長となり続いて公安委員会委員長になったが、ジロンド派にもモンタニャール派にも非宣誓司祭にも平等かつ穏健な態度で接した。五百人会議長、ついで司法相となり (1799)、霧月 18 日のクー・デタ後は第二統領に任ぜられ、ナポレオン法典の完成に努力した。第一帝政時代は大法官、ついでパルマ公に叙され、百日天下の間は司法相に再任された。王政復古により、ルイ 16 世の弑逆者とみなされ追放処分にあい、ブリュッセルに亡命 (1816)、1818 年、ルイ 18 世により復権を認められ帰国を許可された。帰国後は政界から完全に引退した。アカデミー・フランセーズの会員にはなっていたが、1816 年に会員名簿から抹消されてしまう。

25) Musée des Arts décoratifs : ルーヴル美術館の右棟の先端、リヴォリ街 107 番地にある建物で、左棟のフロール館と対をなす建物のマルサン館とロアン館の間に新設されたギャラリー・ナポレオンにある。ルドンにより 1900 年に改造され、1902 年 6 月 4 日に

開館した。もともとの建物はチュイルリ宮とルーヴル宮をつなぐために計画され、1806年にペルシエとフォンテーヌにより、1810年からはフォンテーヌ単独で工事は継続された。この工事はリヴォリ街開通工事と並行して実施されたが一度中断され、ルイ18世の命により再開、1825年に完成した。

26) 最高存在 *Etre suprême* は、ロベスピエールの主唱した革命的宗教で、エベール派の主張した「理性崇拜」に対抗するものであった。エベール派を粛正した彼は、翌年の1794年5月7日に国民公会から自然神教的信仰と愛国主義的理想を結合させた宗教を公布させた。この最高存在を賛美する盛大な祭典が1794年6月8日（共和暦2年牧月20日）にチュイルリ宮庭園で盛大に挙行された。この祭儀を司会したのがロベスピエールで、この日が彼の権力の絶頂期である。「最高存在の理念と靈魂の不滅は正義の永遠の呼び声であり、それ故に社会的であり共和主義的なのである」と、独裁者と化したロベスピエールは宣言した。しかしこの新宗教も彼の失脚と共に消滅してしまうのである。

27) Georges Couthon (1756-1794)：クレルモン・フェランの出身で同地で弁護士を開業、大革命勃発と共に同市の裁判所長となった(1790)。立法議会議員(1791)となるやジャコバン派のスポークスマンに就任。病気のため足が麻痺し人手を借りなくては登院できなくなったが、これがまた彼の人気を高めた。ロベスピエールやサン・ジュストの親友となり、国民公會議員となり(1792)、モンタニャール派の過激分子としてルイ16世の処刑に賛成票を投じ、更にジロンド派の没落に貢献した(1793.6.)。公安委員会に入り(1793.7.10.)、リヨンの反革命暴動鎮圧部隊の派遣委員として、大量徴兵を断行し、仮借ない弾圧により暴徒を討伐し、リオン市を占領した。国民公會議長に選出され(1793.12.21.)、革命裁判所に告発された被告の権利をすべて否定した悪法「牧月22日法」(1794.6.10.)を成立させた。この法律で、被告は予審も受けられず弁護士も備うこともできず、判決は死刑のみというものであった。エベール派を一掃し、この悪法で恐怖政治の強化を計った彼もロベスピエールの失脚と共に逮捕され、彼と共に断頭台の露と消えたのである(1794.7.28.)。

28) Edme Bouchardon (1698-1762)：フランスの彫刻家。クストーに学び、ローマ賞を得てイタリアに留学(1723-32)、教皇クレメンス12世などのために製作して名声を得て帰国、王室お抱えの彫刻家となり(1732)、グルネル街の泉水、ルイ15世の騎馬像(1792年に破壊された)、サン・シュルピス教会のキリスト像、マリア像、6人の使徒像などを製作した。冷厳な古典主義の代表者である。

29) ルイ 15 世の騎馬像：この像の建立は、「いとしの君」le Bien-Aimé の愛称で呼ばれたルイ 15 世の病氣快癒を祝って、パリ市長及び市議会が決定したものである。オーストリー継承戦役のため出陣した国王はメッツで奇病にかかり危篤に陥った。この悲報を聞いたパリ市民は国王の治癒を祈願しあらゆる教会に参拝したという。ルイ自身も、もし回復したならば荒廃しているサント・ジュヌヴィエーブの教会を再建すると神に誓願した。国民の熱心な祈りと国王の誓願のためか、ルイ 15 世は奇蹟的に全快し、この朗報がもたらされるや、パリ市民たちは「いとしの君萬歳！」を絶叫したのである。11 月 13 日パリに凱旋した国王は全市をあげての熱狂的な歓迎を受けた。この歓喜の興奮の結果が、ルイ 15 世像建設となったのである。

作者にはイタリア帰りの実力者で彫刻界の巨頭ブーシャルドンに決定した。ルイ 15 世はローマ風の衣裳を纏い、月桂樹をかぶっていた。この像は新設されたルイ 15 世（現在のコンコルド）広場の中央に据えられた。除幕式は 1763 年 6 月 20 日である。この像の台座はシャルグランの作成で「仁慈と善意に龍顔麗しく馬上豊かに高貴なるフォントノワの征服者」の銘がかかれていた。台座の四隅にはピガル作の 4 体のブロンズ像があり、「人心を支配する美德」、力、正義、賢慮、平和を示していた。しかしこの頃になると放蕩と失政のルイ 15 世の人気はガタ落ちて、この像が公開された数日後に馬の首に次のような落首が結んであった。

おお！ 見事な像！ おお！ 美しき台座！
美德たちは足下にある、悪徳は馬上にある。

1792 年 8 月 11 日にこのルイ 15 世像は倒され弾丸製造のため溶かされてしまう。数か月後にルモの手になる巨大な「自由」像が建立される。これは石像で表面を青銅色の石膏で塗ったもので、革命のシンボルの赤いボンネット帽をかぶり手に槍をもち、ルイ 15 世像の台座の上に鎮座していた。この広場の処刑台に登る前にこの立像をみて、「自由よ、自由よ！ 汝の名でいかに多くの罪がおかされたか！」とロラン夫人が叫ぶのである。この像は何度か改造された後、1800 年 6 月に第一総督ナポレオンの命令により取り壊された。

30) Marie Jeanne Roland de La Platière, madame Roland (1754–1793)：木版師の娘で独学で教養を身につけすぐれた知性を備えた女性になる。プルタルコスを愛読して

共和主義に目覚めたという。またルソーの思想に感化された。1780年2月に政治家のロランと結婚、夫の任地であるリヨン近くのラ・プラティエールで暮したが、夫が大革命の報を受けリヨンでジャコバン・クラブを結成して以来、政治に関与する。1791年2月に夫と共に上京し、ジャコバン派のブリソー、ビュゾ、ペティヨンらと交際する。彼女のサロンはジロンド派の活動の中心となり、彼女の美貌とエスプリと熱情は彼女をしてジロンド派の実質的指導者たらしめた。夫が内相に任命されても(1792.3.), 真の内相はロラン夫人だとみなされたのである。モンタニャール派からは夫以上に憎まれた彼女はジロンド派の失脚と同時に逮捕され(5月31日)、一度は釈放されるが再逮捕されてサント・ペラジ刑務所に収容された。この拘留期間中に『回想録』*Mémoires*を執筆した。5か月後に革命裁判所に召喚された彼女は凛とした勇気ある態度を示し、死刑台上でも取り乱すことなく勇気溢れる態度で立派な最後を遂げた。彼女が処刑前に叫んだ「自由よ!…」は名文句として巷間に伝えられた。

31) Statue de Strasbourg : コンコルド広場は現在の形になるまで、何度も改修が加えられた。ルイ・フィリップの統治の時、広場の四隅に8つの小さなパヴィオンがつくられ、そこに1795年に計画されたフランスの大都市を象徴する立像が設置された(1836-1840)。リール市とストラスブール市を示す像はプラディエの作である。彼は後にヴィクトール・ユゴーの恋人になるジュリエット・ドルーエがその当時自分の愛人だったので、このストラスブール市の女神像のモデルに使用したといわれる。

32) このギロチンは、1793年1月21日曜日、ルイ16世を処刑するため、現在のブレスト市像の近くに設置された。5月31日以降はチュイルリ宮の入口の柵の近くの自由の像とブレスト市像の間の地点に設置される。大革命期間中にパリで処刑された人数は2498名、うちコンコルド広場で1119名(ミシュランのガイド・ブックでは1343名)、バスチユ広場73名、ナシオン広場1036名という。コンコルド広場で処刑された有名人は、ルイ16世、マリ・アントワネット、シャルロット・コルディ、ジロンド派、フィリップ・エガリテ、ロラン夫人、デュ・バリ伯夫人、エベール、ダントン、マルゼルブ、ラヴォワジエ、エリザベート夫人、ロベスピエール、サン・ジュスト、クートン等のモンタニャール派などである。

33) François Buzot (1760-1794) : 弁護士出身で、国民公会議員で、ジロンド派のリーダーの一人としてロベスピエールのモンタニャール派と死闘を演じた。政争に破れた後は追求を逃れ、故郷のウール県エヴルーを中心としたノルマンディ地方に反ロベスピエール

の叛乱を組織しようとしたが失敗、逃亡を重ねるうち同じく逃亡中のベティオン元国民公会議長と合流した。しかし自分たちの努力の空しさを知ってか二人一緒に服毒した。彼らの死体はボルドー近郊のサン・テミリオンの野原で発見されたが、死体は半ば狼に喰い荒らされていたという。1794年6月18日のことである。彼はロラン夫人の親友の一人で、彼女のファンであった。

34) le Père Duchesne : 「デュシェーヌ親父」は大革命から笑劇の登場人物として人々に親しまれていた。大革命前後から民衆の政治的意見の代弁者となってくる。1790年にエベールがこの名をとった革命的大衆紙『デュシェーヌ親父』を発行し、直截な論調で大衆に革命の理念を鼓吹し、ジロンド派の追放、対外戦の徹底抗戦、最高価格の設定などを主張し、急進的小市民や貧困層の庶民の支持を集めた。大革命時代の最大のプロバガンダとなり過激派の最大の武器となり、恐怖政治を実現した。しかしエベールがロベスピエールに破れて処刑されると、この新聞も廃刊に追い込まれてしまった。

35) ルイ 16 世の王妃マリ・アントワネットを指すものと思われる。エベールは王妃に対し数々の侮辱の言辞を弄し、また紙上でも暴言を吐き、心ある人々の眉をひそませた。

36) Antoine Quentin Fouquier-Tinville (1746-1795) : 豪農の家の出身。シャトレのバリ刑事裁判所検事 (1774-83)、ついで警視総監書記となる。大革命勃発と共に熱烈に革命を支持、ダントンやロベスピエールに支持されジャコバン派に加入した。ロベスピエールにより、1793年5月に革命裁判所検察官となった。公安委員会のため、彼は反革命分子に対し苛責ない論告求刑を断行、王妃マリ・アントワネットやジロンド派に死刑を求刑した。更に彼は政変により被告となったカミーユ・デムーランやかつての保護者ダントンやロベスピエールに対しても容赦せず、秋霜烈日の論告を行った。しかし熱月9月ロベスピエール派の失脚後に逮捕され、今度は彼が被告席に立つことになる。41日間に及んだ裁判の間、自分は公安委員会に命ぜられるままに動いた単なる道具に過ぎなかったと自己弁護を繰り返したが、その甲斐もなく死刑の判決を下され、処刑された (1795.5.7.)。

37) Antoine Laurent Lavoisier (1743-1794) : パリの富裕な商家の生れで、若い時から科学への興味を持ち、1766年には科学アカデミーのコンクールで入賞、1768年に弱冠 25 歳で科学アカデミーの会員に選出された。同じ年に徴税請負人のポストを入手、1771年には同じ徴税請負人の娘ポールズ嬢と結婚して更に財産を増やした。彼女はその後彼の協力者となる。76年に国立火薬工場監督官となりアルスナルの内に実験室を設置、業務の傍ら研究に没頭した。彼の日常生活は極めて規則正しいもので、午前6時から9時

まで、午後7時から10時までの6時間を自己の研究にあて、その他の時間は本来の業務に専念したのである。大革命に際してはオルレアン地方議会の一員に任命され(1787)、旧制度時代の遺物たる夫役の廃止や商業の自由、老人や貧民のための福祉資金の創設などに努力した。1789年には新度量衡法設定委員ついで国民金庫役員となり、三部会では徴税請負人制の廃止に動き(1791)、税制改革を国民金庫役員として提案した。しかし革命の激化と共に、民衆を苦しめた悪人の代表の一人と目された徴税請負人という前歴を指弾され、他の徴税請負人と共に1793年11月24日に逮捕投獄され、「フランス人民に対する陰謀」の罪で死刑の宣告を受け、コンコルド(当時の革命)広場で、1794年5月8日処刑された。彼は数々の化学上の新発見をしたすぐれた化学者であったが、酸素を始めて元素として命名したことは有名である。

38) Christien Guillaume de Lamoignon de Malesherbes (1721-1794) : 大法官だった父と同じく法曹家の道を選び、パリ高等法院顧問官(1744)となり、父の跡を継いで御用金裁判所首席判事と書籍監督官を兼務した。1768年までこのポストにあった彼はきわめて寛大で『百科全書』の刊行を援助し、執筆した哲学者たちを保護した。ルイ15世に税制改革を進言して不興を蒙り宮廷から追放されるが(1771)、新王ルイ16世により復帰を許され(1775)、内相(75-76)となり王国の警察権を一任されるが、彼は封印状の行使をつつしんでいる。1776年に一度引退するが、1787年に再度政府への参加を求められ国務相になるが、特に政治的に重要な役は演じていない。大革命勃発と共に海外へ亡命するが(1790)、ルイ16世の処遇の激変を憂慮し、国王の裁判に当ってルイ16世を弁護するため帰国する。しかし彼の努力も空しく国王は処刑され、ついで彼も反革命分子として逮捕され娘と孫たちと共に1794年4月22日に処刑された。国王に最後まで文字通り命を賭けた忠臣として歴史に名を残した。彼は1775年にアカデミー・フランセーズの会員となる程の教養人でルイ16世に関する回想録や新聞や出版の自由に関する回想録を残している。

39) Emmanuel Joseph, dit l'abbé Sieyès (1748-1836) : プロヴェンスのフレジュス生れ。修道士となりやがてシャルトル司教代理に就任した(1787)。ロックやコンディヤックの著作から啓蒙思想を知り、また英国滞在中に貧乏な農民たちの不幸などの社会問題に関心を抱くようになる。啓蒙主義的新思想から起稿されたパンフレットで有名になり、特に『第三身分とはなんぞや』*Qu'est-ce que le Tiers Etat?* (1789.1.) でブルジョワ革命の綱領を開陳し、大革命前夜のフランスに大きな衝撃を与えた。三部会には第三身分の議

員として選出され、部会の壁を破る合同部会ひいては国民議会の成立に努力した。彼は人気の割に華々しい活躍ができなかったのは、ひとえに弁舌の才がなかったためといわれる。国民公会議員として彼はルイ 16 世処刑に賛成したが、大革命の激動期には慎重に身を持ち、後になってあの頃は どうしていたのかとの質問に、「生きていたよ」と答えたのは有名な逸話である。ジロンド派の黒幕的存在だったが表だって活動しなかったため、ロベスピエールからは「革命のもぐら」と嘲笑された。しかしこの独裁者の没落後に抬頭し、公安委員会に入り (1795. 3.), 国民公会議長 (95. 4. 21.), バーゼル条約の成立に努力した。総裁政府治下の五百人会議員として勢力を揮い、ベルリン大使などを務めた後、1799 年 5 月 16 日に総裁に就任、武力が権力維持の最大の武器と知ってから軍人たちに接近し、有望株としてナポレオンと結び、霧月 18 日のクー・デタを演出し統領政府を誕生させ、彼自身も統領になった (1799.12.25.)。しかし彼が長い間暖めていた憲法草案がナポレオンに拒否されてしまった。失意の彼を慰めるためにナポレオンは彼を元老院議員に任命しさらに立派な領地を与え、1809 年には伯爵に叙した。王政復古となるや彼は弑逆者としてブリュッセルに亡命、1830 年にやっと帰国することができた。

40) Comité de sûreté générale : 1792 年 10 月 2 日、国民公会によって創設され、1793 年から 94 年にかけて恐怖政治の文字通りの担当者として政治の影にかくれて革命の警備と裁判を監督した。国民公会から選出された 12 名の委員から成り、その中には画家のダヴィッドもいる。熱月 9 日の政変後その役割は減少したが、国民公会の終幕まで存続した。

41) Louis Antoine Léon de Saint-Juste (1767-1794) : 騎兵士官の父を持つが、家は法曹家の家系だった。ソワッソンのオラトワール会の学校で学んだ後、一時法律事務所の書記をしていたが、退職後にランス大学に入学した。若い頃は素行が悪く、母親の貴重品を盗んだりして放蕩したため、数か月間精神病院に監禁された事もある。一時詩作に耽ったが、大革命勃発と共に政治に参加、故郷の村ブレランクール村会の秘書、ついで国民衛兵部隊中佐となり、1790 年 7 月 14 日パリでの連盟祭に参加した。この頃からロベスピエールに心酔しジャコバン派に加入、国民議会に選出 (1791. 9.) されたが年齢不足のため議員になれなかった。しかし『革命とフランス憲法の精神』*Esprit de la révolution et de la constitution de la France* (1791) を出版し成功して注目を浴びた。1792 年 9 月、国民公会議員に選出されるや、ルイ 16 世処刑賛成演説 (1792.11.13.) などの雄弁で一躍人気者になった。女に見紛う清純な美青年だったが、傲慢で残酷、ロベスピエールと共に恐怖政治を確立し、ジロンド派、エバール派、ダントン派を反革命分子として粛正した。また

対外戦争の徹底抗戦派で、自ら政府派遣委員としてライン軍や北部軍を督戦し、衣服や食糧の補給を確立、士気を鼓舞し軍紀を厳正にした。国民公会議長となるや（1794）、彼は革命政府の財政的基盤を確立するため努力し、また貧農救済のため反革命分子の財産や土地を没収し、これを彼らに分配した。最後までロベスピエールに忠誠を尽し、彼と共に処刑された（1794.7.28.）。

42) Jean Lambert Tallien（1767—1820）：ベルシー侯の執事の子として生れ法律事務所書記、商店員などを行っているうち大革命となり、運が開けた。ジャコバン派に加入し、パリ市の掲示板に週二回張りだす新聞『市民の友』*L'Ami des citoyens*を創刊した。1792年8月10日のチュイルリ宮攻撃に参加、パリ・コミューヌ書記の秘書となり、国民公会へセヌヌ・エ・オワーズから選出された。モンタニャール派の論客としてルイ16世処刑やジロンド派打倒に活躍し、1793年9月に恐怖政治漸行のためボルドー派遣された。しかし彼はその地の囚人のなかにフォントネ伯から離婚された美人のテレサ・カバルスを認め、彼女を愛人にする。彼女の影響で彼は次第に温健になり多くの囚人を釈放した。やがてロベスピエール打倒の陰謀を企て成功し、公安委員会に入り、革命裁判所とジャコバン・クラブの廃止に努力した。1795年6月、ブルターニュ派遣の国民公会委員としてキブロンに上陸した王党派を逮捕し処刑した。かつての同志のジャコバン派から裏切者として、温健派からテロリストとして目された彼はこれ以後余り目立った活躍ができなかった。ナポレオンのエジプト遠征に同行したが帰途に英軍の捕虜となり、1802年にやっと釈放された。愛人だったテレサを正式の妻としたが（1794.12.）、美人の彼女は浮気が絶えず遂に離婚、晩年を不遇のうちに過した。

43) La Conciergerie：普通の意味は、門番とかアパートの管理人だが、ここでは王宮警備司令官コンシェルジュが監理する王宮内の場所で王宮全体とってよかろう。シテ島に偉容を誇るこの建物は、古い所はカペー王朝時代の部分も修復されて立派に残っている。衛兵詰所だった地下室は、14世紀頃から牢獄に転用され、特に大革命時代は反革命分子を収容したことで有名。マリ・アントワネットを始めとして、1793年1月から翌年7月にかけ約2,600名がギロチンの待つ革命（コンコルド）広場、カルーゼル広場、バスチーユ広場、ナシオン広場に送られた。

44) Claude Nicolas Ledoux（1736—1806）：フランスの建築家で、パリやヴェルサイユに見事な館を建造し、得意客の中にはデュ・バリ伯夫人もいた。1784年から87年にかけて、徴税請負人の壁の門に入市税収納所の一連の建物を建設した。これらの建物は奇妙に

幻想的で大革命を予感させる雰囲気を漂わせていた。王党派の容疑で、1793年に逮捕投獄されるが、この拘留期間中に『美術、風俗、法律の関係から考察した建築』*L'Architecture considérée sous le rapport de l'art, des moeurs et de la législation* を執筆している。ロベスピエールの失脚でギロチン行きは免れた。

45) La Villette：第10区から第19区に至るラ・ヴィレット大通り（長さ1.800米、最小幅42米）は徴税請負人の塀に沿って走っていた。この大通りの南端と中間に計4か所の城門があり、入市税を徴収していた。ベルヴィル、ショピネット、コンバ、サン・マルタンの各城門である。現在のピュイソン・サン・ルイ街の出口にあるショピネットの入市税徴収所の建物はそれぞれ6本の円柱で装飾された2つのアーケードをもつ堂々たるものである。

46) Denfert-Rochereau：この大通りは第14区にある長さ490米、最小幅31.64米の通りで、この大通りがアラゴ、ラスパージュ、ルクレク、サン・ジャック、パーク・ド・モンソー、フロワドヴォーなどの大通りが合流する地点に同名のダンフェール・ロシュロー広場を持つ。この広場はオルレアン街道の出発点になる交通の要所で、ルドゥーは1784年から87年にかけて道の両脇に一对となる入市税徴収所の大きな建物を建設した。この建物はアーケードを持ち壁面は浅浮彫りで飾られた豪勢なもので現存している。当時は la barrière d'Enfer と呼ばれたこの徴税請負人の建物はパリに商品を搬入する商人たちにとって、文字通り入市税徴収の「地獄」Enferの入口であつたらう。

(續　く)

(追　記)

- (1) 参考図書などは、〔I〕の巻末に掲載してありますので、そちらを御参照下さい。
- (2) 前稿〔XV〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p. 3. 第1行目　エリザベート夫人